第３回登別市総合計画第３期基本計画市民検討委員会育み部会議事録

◆開催日時　　平成２６年６月３０日（月）　１７：３０～１８：３０
◆開催場所　　登別市民会館　小会議室
◆出席部会員　部会長　　安宅　錦也
　　副部会長　川村　正勝
　　部会員　　仲川　弘誓
　　合田　美津子
　　佐藤　文子
　　磯田　大治
　　佐藤　史彦（庁内検討委員会　部会長）
　　【教育部次長】
◆欠席部会員　千葉　浩樹（庁内検討委員会　副部会長）
　　【教育部社会教育Ｇ総括主幹】
◆事務局　　沼田総務部企画調整Ｇ総括主幹
　　上野総務部企画調整Ｇ企画主幹
◆議題　　「第５章　豊かな個性と人間性を育むまち」について

〈部会長〉
今日がフリートークの最終日ということで、前回に引き続き、それぞれの立場からの思いや、まちづくりに生かしたいことなどを話していただき、次の会に向けて方向性を出せればと思っておりますのでよろしくお願いします。

〈事務局〉
これから育み部会の教育環境等について、体系図をもとにして話をしていきます。前回は、個人的な取組や気になっている事についての話をしていただきましたが、今日は教育・生涯学習の中で、ぜひ反映させたいことや主軸にしたいことについて、今後１０～２０年を見据えた中で必ず考えなければいけないことについて話を進めていきたいと思います。
教育、生涯教育、社会教育についての問題提起をしていただき、第５章の体系図に入るときにはそれをもとに話をしたいと思います。

〈部会員〉
私が教育の活動をずっと続けてきた根底には、登別の文化・教育活動が脆弱だと思っていたことと、将来への展望と現状をリンクさせて発展的に充実させていきたいと

いう思いがありましたが、いくら頑張っても無理だと思うので、今日は子どもたちの問題についてお話ししようと思います。

登別の子どもたちの学習環境をしっかりしていくことが絶対必要で、国の教育制度が、グローバルジェンダーの育成とか、国際化に向かってきて、外国人を雇用するとか、そういう大きいなテーマが出ており、それが将来的に地域とどのように関わってくるのかが私の中で非常に興味のあるところです。

地方の教育環境は非常に遅れていますが、佐賀県のあるまちでは、電子情報を入れた教育や花マル塾の導入という試行的な取り組みを始めていますし、こんなにのんびりしていていいのかなと思います。

〈事務局〉

第５章に限らない話ですが、登別市の人口は減らさない努力はしますが減っていくのは避けられないのかもしれません。

子どもが減り高齢者が増えていく社会環境になったときに教育や生涯教育をどうするかを、第３期基本計画では考えなくてはいけません。

第２期の時点では国も人口減少を問題視していなかったので、今回はしっかりと考えなければなりません。

子どもたちの教育を考えるときに、例えば学校の適正配置をどうするか、基本計画の中ではどういう路線にしていくか、ということを市民目線で議論していただきたいと思います。

生涯学習というのは高齢者になってもやっていかなければなりませんが、生涯学習の担い手を考えるときに高齢者はますますそういうことに関わっていくと考えられますので、そういう視点を持っていただくための話し合いを進めていただければと思います。

〈部会員〉

高齢化社会が続いていく中で、生涯学習と子どもたちの学習をうまくつなげていかなければいけません。

高齢者が子供たちと一緒に何かを積み上げて行くことで、高齢者も健全な肉体と精神を保てます。

趣味を持った高齢者が健康で長生きする、認知症になりにくいと言われていますが、自分のために取り組むというシステムは高齢者にも子どもたちにもメリットがありますし、そういうシステムを考えなければいけない時期に来ていると思います。

子どもの数も減っていますが、子どもたちが目標を持てる環境づくりも必要です。目標を持った子供は努力をしますし、目標を持てるようにするためには本物を見せる機会を増やすなどいろいろな方法があると思います。

これは、学校単位ではなく、まち全体で子どもにそういう機会を与えなければならないと思います。

子どもに早い時期から目標を持たせてあげられる地域・教育づくりをする、という文言を計画に盛り込めるとよいのですが。

〈部会員〉

地域のスポーツは、学校の体育の授業を基調とした学域と、スポーツを長らく支えてきた企業の職域が担ってきましたが、特に職域の部分では少子高齢化の進展や経済状況の悪化等によりスポーツについては縮小せざるを得ず、その結果として総合型地域スポーツクラブの考え方が出てきました。

以前、登別には各小学校にスポーツ少年団があり、町内会単位でサッカーや野球の対抗戦ができるほどでしたが、今ではひとつの小学校で団体競技をやること自体が難しい状況ですから、学校を中心とした地域の単位でスポーツや健康増進を考えた方がいいと思います。

ただ、それらを全部公正・公平に運用していくと、スポーツ少年団も、スポーツ推進もとなって負担が増すことになり、どこに焦点を当てて、どこに注力したらいいのか分からなくなりますので、その部分の考え方を体系図に盛り込んでいただければと思います。

指導者の育成については、基本的に競技団体の上部組織が行うものとの考えが強く、自分たちで育てようという雰囲気ではありませんね。

〈事務局〉

それはどうすれば良くなりますか。

〈部会員〉

サッカー界は、ワールドカップの日韓共催で資金的にも余裕が生まれたため、日本体育協会に頼らなくても活動できるようになり、それから指導者養成を積極的にやっています。

メンバーシップ制というのが引かれていて、日本全国どこでサッカーをするにしても日本サッカー協会の傘下に収まっていて、指導者養成のカリキュラムも統一化されています。

指導者のライセンス料があちこちから入ってきますので、サッカー協会をどんどん潤沢にしています。

こんなにシステム化されたところは、サッカー以外ではなかなか見当たりません。

日本の野球では、プロとアマチュアはほとんど交流しませんが、サッカーでは、アマチュアがあるからプロがあるという考え方です。

〈事務局〉

５章の中身で、登別市だけが突出して遅れている、劣っているということは基本的にはないと思います。

他のまちで行っていることは、登別市の計画にも盛り込まれているものと思いますが、それで可としてしまうと、基本計画自体がいらない、文科省が言うとおりにすればいいという話になってしまうので、そこに色を付けていきたいと思います。

スポーツの関係であれば、あそこのまちでは行政としてこんな取り組みをしているが、登別でもできないのか、といったような話が出るといいですね。こういう考え方や、こういう事例があるとか。

生涯学習、生涯教育でいえば、文化協会さんが担っている部分がかなり大きいですよね。

〈副部会長〉

文化協会では、尺八の音や歴史のほか、日本古来の楽器としてこういうものがある、ということも学校で教えており、今まで尺八に全く興味がなかった子どもたちから、すごく良かったという感想文をいただいたりしています。

やはり、実際に体験をしてもらうことで、いろいろな文化に触れることができますし、そういう取り組みを教育現場で行っていくことを推進するようなシステムが必要ではないでしょうか。

〈事務局〉

私たちが子どものときは、学年で６～７クラスもありましたが、今では１クラスしかない学年があったりします。

結果として少人数クラスになるメリットもありますが、これはよいことなんでしょうか。

〈部会長〉

学習内容の定着という意味で言うと少人数指導になると思いますが、スポーツ・文化などいろいろな学びの部分では、ある程度人数がいないと成立しませんので、そのバランスも含めて、学校の適正化という部分で、効果的に学習を進める上での最適な人数というものを検討してもらっています。

基本的には２学級各３０人程度として、小学校では６０人前後の２学級を念頭に置いて考えていくことになるのではと思います。

今、小学校の１・２年生は１クラス３５人学級がベースですが、３年生になると４０人がベースとなります。

例えば、７０人を少し超えるような学年では、１・２年生までは３クラスで、３年生から２クラスとなりますが、それを３クラスのまま行けるかという可能性も含めて考えていくことになると思います。

一般的には人数として２０人以上いないと、良い意味での競争意識が働かなくなるといわれており、４０人クラスと２０人クラスでは教え方も変わってきますので、小学校では、やはり２０人から３０人前後のクラスが理想だと思います。

〈部会員〉
　教育を考える上では、少数のクラスになるといろいろなメリットがあるのでしょうが、部活やスポーツをするとなるとデメリットの部分も出てくると思いますが。

〈部会長〉
　今は、部活でいうと、サッカーをやりたい人が学校に５～６人しかいなくてチームを作れない場合は、合同チームにして中体連に参加したりというような対応をしています。

〈部会員〉
　それは、個々で練習をして大会が近付くと合同で、ということですよね。根本的なチームワークを養える環境ではないと思うのですが。

〈部会員〉
　サッカーではジュニアユースができましたから、本当にやりたい子どもについては、そのようなクラブチームに入って年齢や段階に応じた指導を受けることができます。
　サッカー以外では、野球に軟式・硬式のクラブチームができて全国とのつながりが少しずつできています。

〈副部会長〉
　やりたいことができる環境がない場合の対応として、学校間や市、文化協会、体育協会などで協力体制をとることはできないでしょうか。

〈部会員〉
　体操クラブのようなものだと市内にもありまして、同じ目的を持った子供たちがそちらへ通っています。
　２０年くらい前には小学校にも小体連というものがあり、野球、サッカー、バスケットボール、バレーボールなどで交流を図っていましたが、子どもの数が少なくなり交流ができなくなった時点で小体連もなくなりました。

〈事務局〉
　昔も部活をするとそれなりにお金がかかりましたが、今は、クラブチームに参加して、というようにお金のかかる意味合いが変わってきていると思いますが、やりたいけれど家庭の経済状況によっては、誰でもということにはならなくなっていると思いますが、おにスポの役割というのは、まさに、このような子どもたちの環境を改善しながら吸い上げていくということではないでしょうか。
　例えば、サッカーが上手な子はそこに入っていけますが、初心者ではなかなか入り

にくいですよね。

〈部会員〉
　それを打開するために、競技志向の全くないサッカースクールをひとつと、サッカーだけにこだわらない複数のスポーツを同時にできるものの中にサッカーが埋め込んであるというサークルも展開しています。

〈事務局〉
　もう部活の概念ではなく習い事になってしまっているのですね。

〈部会員〉
　親の考え方としてはそれに近いと思います。

〈部会員〉
　文化でも教育でも一緒で、伸ばしたい人は塾に行ったり家庭教師をつけたりしていますし、できる人が一部の社会環境の整った子どもたちだけに限られる、というのをなんとか打破したいですね。
　努力すればそういうこともできるのだと。

〈事務局〉
　文科系のサークルは今どうなんですか。

〈部会長〉
　書道教室では小さいころから通ったりする子どもが多いですね。
　地区にひとつ程度はありますし、先生が他の教室を掛け持ちしている例もあります。

〈事務局〉
　のぼりんの文化講座なども、担い手づくりの観点から文化協会さんにお願いして講座を開いています。

〈部会員〉
　ハードルが高いものは、イベントにコーナーを設けるなどして入門のきっかけになればいいと思います。
　習うまでいかなくても少しでも触れたことがあれば、機会があったときにちょっとやってみようかという繋がりが出てくるのではないでしょうか。
　子どものときの出会いの影響は大きいと思うので、機会は多い方がいいと思います。

〈部会員〉
大人にも機会を与えないといけないですね。

〈部会員〉
百人一首の大会も、昔はたくさんチームがありましたが、今年はできないかもしれないという状態でした。

〈事務局〉
スポーツ系ではスポーツクラブなどの道があると思いますが、文系はそういうものが非常に少ないですね。
それが時代の流れと言ってしまえばそれまでですが、本当にそれでいいのかと思います。

〈副部会長〉
若い人たちが尺八をやるということが少なくなっています。若い人が何人か出てきましたが、それもやはり母親がやっているとか、そういう部分での広がりしかありませんね。
尺八の面白さをどのように教えていくのか考えなければいけません。
学校で教えることもありますが、そこから繋がっていく子どもたちがいませんので、どのように伝承していけばいいのか、ということが課題となっています。

〈部会員〉
サッカーや野球は親が一緒になって一生懸命やるんですが、それが文科系になると、子どもは百人一首が好きでやりたいけれど、親がそんなの面倒だからいいよ、という感じで温度差があると感じますし、サッカーや野球とは違う存在になっているというのが現状ではないでしょうか。

〈部会員〉
このままいくと本当に厳しくなると思います。子どもが減ってきているのに、子どもがインターネットを含めた様々な価値に触れることが膨大に増えてきました。
サッカーだけをしていればいいとは、どの指導者も思っていませんし、人間育成の場と捉えていますので、挨拶など礼儀をしっかりと身に付けさせる指導は当然行っております。
サッカーを窓口にして社会体験の場を作ってあげるとか、文化に触れる場を作ってあげることはできると思います。
例えば、サッカーの子どもたちの合宿でお茶を経験させるとか、モモンガくらぶさんに参画するなど、スポーツと文化とのコラボレーションを低学年の子どもを対象にのぼりんで企画することはできると思います。

〈部会員〉
中学校では学校に琴を置いているようですが。

〈部会長〉
寄贈されているところはありますが、基本的には個人の持ち物なので、なかなか触らせてもらえません。
邦楽鑑賞のときに委員会が持ってくるもので、学校に置いておくということはありません。

〈事務局〉
今の市民活動は、高齢者やリタイヤした人たちが担い手となっていますが、今の子どもたちが高齢者になったときに何をしてるのかなと思います。
ずっとネットの世界にいるのも時代なのかもしれませんが、このまま担い手が減っていき市民活動は衰退していくのでしょうか。

〈部会員〉
日本の文化については、外国人の方が詳しくなるのではないでしょうか。

〈部会員〉
お茶を習いに行くことはできなくても学校で教えるのはいいですね。

〈部会員〉
作法やお茶の飲み方も簡単には教えられませんが、真似をして茶碗を持ってみる、お茶を飲んでみるということをするだけでも違うと思います。

〈部会員〉
文化的なことは余裕がないとなかなかできません。
スポーツは余裕とは違うと思いますし、小学生・中学生は、勉強などで決して余裕があるわけではないと思いますし、その中で自発的に文化に触れようとしてもなかなかできませんので、学校の授業でやるなどの工夫をしなければ、そういうものと接することができないと思います。

〈部会員〉
世代間交流のように、昔の遊びというテーマでやるとか、全員参加型で昔の文化に触れるという形で取り組んでみてはいかがでしょう。

〈事務局〉
体系図の中でも総合的な学習の時間の充実というのは盛り込んでありますし、今後体系図を作っていく中で、日本の文化を伝承する時間を設けるべきだという提言があってもいいと思います。
あと、今日お聞きしておきたいと思ったのは、学校を将来的にどうするべきかということです。
例えば統廃合ですが、これは単純に人数が少ないから合併してしまえという乱暴な話ではないと思いますし、今後どう対応していけばいいのでしょうか。
子どもたちの学習環境も、スポーツならば人数が少ないと困るかもしれませんが、じっくり勉強を教えるという視点では少人数でも利点があります。
市教委が策定した大きな考え方では、1 学年 2 学級、1 学級 20 人以上というのが大きな方向性なんですよね。

〈市庁内部会部会長〉
あくまで方針ということで計画ではありません。
どこの学校とどこの学校を統合するということではなく、新たに配置するのであればどういうことが考えられるのかということを言っているものです。
例えば、１学級２０人という基準があり、１学級が２０人に満たない学校があれば、２０人以上の複数クラスを求めるために再編成をしなくてはならないということで、具体的な統合計画を言っているわけではありません。
こういうことが考えられると方針の中で示したということです。

〈部会員〉
６－３－３制の見直しという話も出ているようですし、例えば、総合の学習の中で、各学校の子どもが集まって授業をするということも可能なのではないかと思うのでが。

〈部会長〉
学校ごとにカリキュラムがあって、総合的学習というのは、それぞれの学校でできることとできないことが決められます。
また、指導者の問題もありますので、いろんな学校の子どもたちを集めての授業は、学校によって学習時間も違うので難しいです。
夏休みの期間などで集中的にやるならできないことはありませんが、普段の授業の中で枠を外して、ひとつの場所に子どもを集めて好きなことをやらせる、というのは移動の部分も含めて難しいと思います。

〈部会員〉
この計画の 10 年の間に統廃合の可能性はあるんですか。

〈市庁内部会部会長〉
どの地区で再編するかということについては今後２０年後までの小学生の数をもとに考えなければなりません。
１クラスが２０人以上になるよう再編成するとなると、離れた場所にあってもスクールバスを運行して通学させるということも考えていかなければなりません。

〈部会員〉
建物も複数よりひとつにまとめたほうがランニングコストも下がるでしょうし。

〈部会長〉
室蘭はそういう考えで統廃合を進めているようで、子どもの数とスクールバスでどう通わせるかということも考え方のひとつだと思いますが、子どもが病気になり自分で帰る場合や、保護者が迎えに行くとなった場合に距離が離れすぎていると困りますし、本当に通える範囲はどれくらいの距離なのかも含めて考える必要があると思います。

〈事務局〉
少人数学級のほうがいいのでしょうか。

〈市庁内部会部会長〉
少人数のほうがいいのかといえば、良い面も悪い面もあります。
メリットとしてはきめ細かく子どもに接することができること、デメリットとしては切磋琢磨ができないということになると思います。
それをどう解決するかと考えたとき、再編ということになるのかもしれません。

〈部会員〉
そこのメリットとデメリットを少し整理しなければいけませんね。

〈部会員〉
例えば、子どもが病気になったときの対応では、親がその都度迎えに来るのではなく、福祉とも絡めた対応ができるシステムが構築されていれば解決できることだと思いますので、様々な事例を研究して進めていくべきだと思います。
統廃合を考えるのであれば、リスクも折り込んだ対策を考えなければいけません。

〈事務局〉
この部会では、統廃合ありきで話をするのではなく、子どもたちに提供できるより良い教育環境とは何かというところだと思います。
大人数も小人数もそれぞれメリット、デメリットがありますから、提言する側が統廃合についてのあるべき姿をイメージし、それを念頭に置きながら提言を行うべきだと思います。

〈部会員〉
どうあるべきかという問題であれば、私たちが論ずるようなことなのでしょうか。

〈事務局〉
正解はありませんが、それは市民の目線でこれまでの市民生活を念頭に置きながら、どうあるべきかを論ずるべきだと思います。

〈部会員〉
すべてを平等にというのはなかなか難しいと思いますし、どこかを厚くすると薄くなるところも出てきますので、薄くなったところは地域でカバーするという仕組みができればいいと思います。
例えば文化の部分を学校の授業で行ったとして、そこに何らかの予算措置があり、少人数制の学校編成が行われる中で、スポーツなど希薄になるといわれている部分についてはスポーツ団体がそれを担い、そこに何らかの補助が出るという仕組みができ上がれば、スポーツについては何とかなりそうな気がします。
注力する部分が見えてくると分かりやすくなりますし、スポーツ施設を新設するのが難しいということは理解できますので、せめて今の学校開放事業をもう少し効率よくしてほしいですね。
ひとつの団体が場所を押さえてしまうと、同じ競技をやっている仲間がその会場を使えないということになってしまいます。

〈事務局〉
登別にはこのスポーツ、この文化というのが無いですね。

〈部会員〉
別に特化するものが無くて困っていることはないですね。

〈部会員〉
この基本計画もそうですが、特色が無いのは悪い事なのでしょうか。何でもできる自由があります。

〈部会長〉
特色を持たせるという部分で言うと、どこの学校も今模索している最中ではないかと思います。
今年からコミュニティスクールを施行して、地域と共にある学校づくりという部分を前面に出しながら、学校づくりを進めていこうという取り組みが今進んでいますので、今後どういうものを取り入れていくかということが課題となっています。
また、学力を全国平均以上にするという道教委の目標が、各市町でどこまで達成できているかの結果が２学期に出ますので、それに基づいて更に改善を図る手だてが各学校に求められています。
登別ではコミュニティスクールの推進という取り組みがありますので、地域と共にそれをどうしていくかという部分と、全道に先駆けてどのような事業を展開していくのか、その成否を含めてどのように対応するのかということが問われています。

〈部会員〉
学力は北海道は低いと出ましたね。

〈部会長〉
全国レベルでいろいろな形で進んでいる秋田や福井などでやっていることをどう取り入れていくか、というのが全道的な課題になっています。

〈部会員〉
学力向上には、学校の先生方の子どもたちへの教育指導能力と、保護者の意識のどちらが重要ですか。

〈部会長〉
今言ったふたつを両輪にして、家庭の中で何ができるのか、家庭に協力してもらう事は何か、学校として子どもたちにどういう力を付けるのか、という議論をしているところです。

〈部会員〉
家庭にも、問題意識を持って何が必要かを考えてもらわなくてはいけません。

〈部会員〉
どういうものが必要なのかを提示されて、それを議論してフィードバックして全体を底上げして、という方法になるのであればいいのですが、子どもにどんな教育をしようと家庭のことを抜きにして学力を語れるわけがない、ということを皆が理解しないと難しいですね。

〈部会員〉
　子どもの意識も親の意識も変わっていますし、そういう意味では今の若い先生は大変ですね。親とのコミュニケーションの問題もありますし。

〈部会長〉
　次回は体系図に入って、どのような政策に取り組んでいくかを話し合いましょう。

〈事務局〉
　次回は７月１１日（金）１７時３０分から、その次は２２日（火）１７時３０分唐となります。場所については追って連絡しますのでよろしくお願いします。
　次回から忘れないで持ってきていただきたいのが、第３期の体系図案と２期から３期への見直し調書、第２期基本計画の３種類です。